

### (3) モ モ

#### 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
せん孔細菌病(細菌)	<p>①春型枝病斑は見つけしだい除去する。</p> <p>②風当たりを弱くするために、防風垣や防風ネットを設置する。</p> <p>③袋かけを行う品種の場合、果実感染を軽減するために、早期の被袋を行う。</p>	<p>①発生園では4～7月に農薬を散布する。(収穫前日数に注意)</p> <p>(例)</p> <p>オキシテトラサイクリン水和剤(マイコシールド)</p> <p>オキシリニック酸水和剤(スターナ水和剤)</p> <p>ジチアノン水和剤(デランフロアブル)</p> <p>ストレプトマイシン水和剤(アグレプト水和剤)</p> <p>チウラム水和剤(チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル)</p> <p>バリダマイシン液剤(バリダシン液剤5)</p> <p>②秋期(9月中旬～10月上旬)に農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン水和剤(アグリマイシン-100)</p> <p>カスガマイシン・銅水和剤(カスミンボルドー、銅水和剤)</p> <p>銅水和剤(コサイド3000、ICボルドー66D)</p>
<p>【参考事項】</p> <p>病原細菌は新梢の皮部組織内で越冬し、4月になると病斑を形成する。ここで増殖した細菌が雨滴に混じって分散し、葉や果実の気孔や傷口から侵入する。</p>		
縮葉病 ( <i>Taphrina</i> )	<p>①病葉を摘み取り園外で処分する。</p>	<p>①3月中旬～下旬の発芽前に農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>石灰硫黄合剤</p> <p>有機銅水和剤(キノンドー水和剤40、オキシンドー水和剤80など)</p> <p>②初発後～5月に病葉を摘み取って農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>チウラム水和剤(チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル)</p>
<p>【参考事項】</p> <p>被害葉に形成された子のう胞子が飛散して枝や芽の附近に付着し、新しい分生子を作り越冬する。発病適温は13～17℃である。</p>		
黒星病 ( <i>Cladosporium</i> )	<p>①5月下旬までに袋かけを終了する。</p> <p>②病果や病枝を切り取り、処分する。</p>	<p>①3月中旬～下旬の発芽前に農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>石灰硫黄合剤</p> <p>②4月下旬～6月上旬に農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>イミノクタジナルベシル酸塩水和剤(バルコートフロアブル)</p> <p>ジチアノン水和剤(デランフロアブル)</p> <p>ジフェノコナゾール水和剤(スコア顆粒水和剤)</p> <p>ジフェノコナゾール・フルキサピロキサド水和剤(アクサーフロアブル)</p> <p>ピラクロストロビン・ボスカリド水和剤(ナリアWDG)</p>
<p>【参考事項】</p> <p>枝上の病斑組織内で菌糸の形で越冬する。発病適温は18～23℃である。感染してから発病するまで30日程度である。</p>		
炭疽病 ( <i>Colletotrichum</i> )	<p>①病枝を切り取る。</p> <p>②摘果、袋かけ時に病果を摘除する。</p>	<p>①4月中旬～6月上旬に農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>トリフロキシストロビン水和剤(フリントフロアブル25)</p>
<p>【参考事項】</p> <p>病果や病葉を生じた枝が伝染源である。越冬後、4月中旬頃から罹病枝に分生子を作り、降雨で伝染する。</p>		
ホモプシス腐敗病 ( <i>Phomopsis</i> )	<p>①枯れ枝を除去する。被害果の早期発見と早期除去に努める。</p> <p>②密植を避けて通風、採光を図る。</p>	<p>①収穫20日前から収穫期に予防散布を重点に農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>イプロジオン水和剤(ロブラール水和剤)</p> <p>イミノクタジナルベシル酸塩水和剤(バルコートフロアブル)</p>
<p>【参考事項】</p> <p>枝に寄生又は腐生して越冬し、春になると柄胞子を形成する。発病適温は25～30℃である。</p>		
灰星病 ( <i>Monilinia</i> )	<p>①袋かけをする。</p> <p>②花腐れや被害果は早期に発見し、適切に処分する。</p> <p>③病枝を切り取る。</p> <p>④ほ場内の排水、風通し、日当たりなどが悪いと発病を助長するので、排水を良好にし、密植を避け、徒長枝の適切な管理を行う。</p>	<p>①開花期及び収穫20日前から収穫期に予防散布を重点に農薬を散布する。(収穫前日数に注意)</p> <p>(例)</p> <p>イミノクタジナルベシル酸塩水和剤(バルコートフロアブル)</p> <p>クレソキシムメチル水和剤(ストロビードライフロアブル)</p> <p>ベノミル・TPN水和剤(ダコレート水和剤)</p>
<p>【参考事項】</p> <p>病原菌は被害果や被害枝で越冬する。発病適温は20～25℃である。</p>		
アブラムシ類		<p>①展葉期新梢伸長初期に農薬を散布する。</p> <p>(例)</p> <p>アラニカルブ水和剤(オリオン水和剤40)</p> <p>スピロテトラマト水和剤(モベントフロアブル)</p> <p>ダイアジノン水和剤(ダイアジノン水和剤34)</p> <p>ピリフルキナゾン水和剤(コルト顆粒水和剤)</p>
<p>【参考事項】</p> <p>冬寄主の芽の周囲、その附近の小枝で卵で越冬する。</p>		

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防
カイガラムシ類	①越冬期に枝幹に寄生しているカイガラをたわしや竹へらで削り落とす。  【参考事項】 雌成虫で越冬する。幼虫発生期は5月上旬～6月上旬、7月中旬～下旬、8月下旬～9月下旬の3回である。本種には多種の天敵がいるので、天敵を保護するように農薬を選択する。	①幼虫発生初期に農薬を散布する。(収穫前日数に注意) (例) アセタミプリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤) スピロテトラマト水和剤(モベントフロアブル) ブプロフェジン水和剤(アブロードフロアブル)(カイガラムシ類幼虫) ②落葉期から年内までに農薬を散布する。 (例) マシン油乳剤(トモノールS、ハーベストオイルなど)
ナシヒメシ ンクイ	①袋かけをする。 ②食入初期の新梢を切り取って内部の虫を殺す。 ③越冬虫を取り除くために、冬期に粗皮削りをする。 ④秋期には枝幹部にバンド巻きを行い、越冬虫を誘引し2月頃に取り外して適切に処分する。  【参考事項】 老齢幼虫で粗皮下などの隙間に繭を作って越冬する。	①適期に農薬を散布する。重点防除時期は3月下旬、4月中旬～下旬、6月上旬、7月上旬、7月下旬、8月中旬である。(収穫前日数に注意) (例) アセタミプリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤)(シンクイムシ類) シクラニプロール液剤(テッパン液剤)(シンクイムシ類) シアントラニプロール水和剤(エクシレルSE)(シンクイムシ類) フルベンジアミド水和剤(フェニックスフロアブル)(シンクイムシ類) ②性フェロモン剤を4月上旬から地域で導入する。 (例) オリフルア・トートリルア・ピーチフルア・ピリマルア剤 (コンフューザーMM)(果樹類)
モモノゴマ ダラノメイ ガ	①袋かけをする。 ②冬期に粗皮削りをする。  【参考事項】 老齢幼虫で粗皮下などの隙間に繭を作って越冬する。	登録農薬は無い。
コスカシバ	①4月頃、虫ふんを目あてに樹皮を削って中の幼虫を殺す。 ②秋期に虫ふんの出ている樹皮を小槌でたたき、若齢幼虫を圧殺する。  【参考事項】 幼虫で枝幹の加害部で越冬する。成虫は年1回の発生で、5～10月まで長期間発生し、5月と9月が発生ピークとなる。	①休眠期(落葉後～萌芽前)に農薬を塗布又は散布する。 (例) フルベンジアミド水和剤(フェニックスフロアブル) MEP乳剤(ガットキラー乳剤、ガットサイドS) ②性フェロモン剤を広域に設置する。 (例) シナンセルア剤(スカシバコンL)(果樹類)
モモハモグ リガ	①落葉した葉にも繭を作っているの で、羽化する前に集めて処分する。  【参考事項】 樹幹の間隙や建物の間隙などで成虫で越冬する。年6～7回発生する。	①適期に農薬を散布する。防除時期は、4月下旬、5月下旬、6月下旬、7月中旬、8月上旬で、特に4月下旬の防除を徹底する。(収穫前日数に注意) (例) アセタミプリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤) クロルフェナピル水和剤(コテツフロアブル) シアントラニプロール水和剤(エクシレルSE) フルベンジアミド水和剤(フェニックスフロアブル) ②性フェロモン剤を地域で導入する。 (例) オリフルア・トートリルア・ピーチフルア・ピリマルア剤 (コンフューザーMM)(果樹類)
ハダニ類	①発生源になりやすい下草雑草をこまめに刈る。 ②バンド誘殺する。  【参考事項】 同一(RACコードが同じ)農薬の連用は抵抗性がつきやすいので注意する。	①生育期に農薬を散布する。(収穫前日数に注意) (例) エトキサゾール水和剤(バロックフロアブル) シエノピラフェン水和剤(スターマイトフロアブル) シフルメトフェン水和剤(ダニサラバフロアブル) ②冬期に農薬を散布する。 (例) マシン油乳剤(スプレーオイル、トモノールSなど) (ハダニ類及び越冬卵)